

<研究ノート>

エクアドル・ポピュリズム論の一考察
—ベラスキスモ研究の成果と課題—

新 木 秀 和 (上野学園大学)

はじめに

ポピュリズムという用語は、ラテンアメリカの社会・人文科学の研究で広く用いられながら、その意味に曖昧さがつきまとう概念である。政治学、社会学、それに歴史学の分野だけでなく、近年では経済学でも「経済的ポピュリズム」という言葉が使われている¹⁾。このことは概念の多義性を暗示するばかりか、論者による恣意的な使用を許し、いたずらに意味内容の拡散を招いている面も否めない。政治場裡でポピュリズムやポピュリストという言葉が反対者を批判するためのネガティブな意味合いで使われることはともかく、学術用語としても解釈は多岐にわたり、定義を難しくしている。かかる状況を見るとポピュリズムという用語の使用には慎重さが必要だといえる。政治、歴史、経済のいずれの文脈で使うかを明確にしつつ議論すべきだし、概念自体のとらえ直しが不可欠となっている。

議論を政治や歴史分析におけるポピュリズム研究に限っても、研究史にはかなりの厚みがある。典型的な事例としてはペロニズム、カルデニスモ、ヴァルギズモなどが研究者の関心を引き、総括的ないし理論的な研究、それに個別の実証研究が積み重ねられてきた。日本人研究者による本格的な研究も生まれている。ただこうしたなかで気づくのは、研究の大半が域内主要国の事例に集中してきたことである。とくにペロニズムの分析が研究

の主流をなしてきたことは明らかで、ペロニズム的偏向も指摘されている²⁾。いずれにせよ、コニフ編の研究書で扱われる事例が研究範囲をほぼ反映しているといつてよい³⁾。

これに対し、研究の主流からこぼれ落ち、ほとんど取り上げられてこなかったポピュリズム現象が存在する。そうした事例の一つがエクアドルのベラスキスモ(Velasquismo)である。この事例についても研究の蓄積は見られ、主としてポピュリズムの文脈で分析が行われてきた。にもかかわらずエクアドル人研究者や少数の例外を除いて、欧米や日本の研究がベラスキスモに言及することはまれだった。このことは英語の文献でもベラスキスモというスペイン語標記がそのまま使用されている点に表れている。つまりベラスキスモ研究でポピュリズム論が参照されても、その逆はなく、研究の流れは一方通行にとどまってきた。今後は各論を進めつつポピュリズム概念自体をきたえ直していくべきだが、その作業にベラスキスモ研究が示唆するものは決して少なくなかろう。

かかる認識に立った本稿では、まずポピュリズムの各論という視角からベラスキスモの研究史を概観し、その成果と課題に交通整理を試みる。次いで、ベラスキスモ研究が問いかける諸点をポピュリズム論一般とつぎ合わせることで、ポピュリズム概念そのものに一定の再検討を試みることにしたい。

1. ベラスキスモ研究の歩み

ベラスキスモは20世紀エクアドルにおける最も重要な政治現象だといえる⁴⁾。行論に先立ち、中心人物ベラスコイバラ (José María Velasco Ibarra, 以下ベラスコと標記) にふれておこう。ベラスコは1930年代から70年代までの約40年間に5度政権に就いた。そのうち4度(1933年, 52年, 60年, および68年)は民主的選挙, また1944年は「ラ・グロリオサ」(La Gloriosa)と呼ばれる民衆蜂起により政権を掌握している。しかし任期を全うしたの

は第3期（1952～56年）のみで、残りの4度はいずれも軍事クーデターや政治対立で罷免され、亡命を余儀なくされた。では、なぜベラスコは出現したのか、その支持基盤は何だったのか。こうした疑問からベラスキスモ研究は開始されたのだった。

（1）クエバ=キンテロ論争とその周辺

ベラスキスモに関する研究者の関心はすでに1950～60年代にみられ、エクアドル人はもちろん米国人研究者による分析も現れている。ブランクステンの研究書（1951年）⁵⁾やメイヤーの博士論文（1965年）⁶⁾がそれである。しかし、それらの初期的研究はベラスキスモを19世紀的なカウディリズムと同一視したり、エクアドル内政への影響を概観するだけで、現象自体についての解釈は表面的な段階にとどまっていた。

そうしたなかで、ベラスキスモに関する最初の重要な解釈を示したのは社会学者のアグスティン・クエバだった。『エクアドルにおける政治支配過程』（初版1972年）⁷⁾において「ベラスコのポピュリズム」(populismo velasquista)という見解を提起する彼は、ベラスコが台頭した背景を次のように説明する。1920年代から30年代にかけてのエクアドルでは、カカオ輸出経済の終焉と世界大恐慌を機に経済危機が発生し、この経済危機が寡頭支配層の危機を招いて権力の真空を生じていた。それは次の3つの支配形式に終止符を打つものだった。つまり、海岸部（コスタ）の農業輸出ブルジョアジーによる自由主義、アンデス高地部（シエラ）の土地所有層による保守主義、そして「七月革命」（1925年）で表面化した軍部の改革主義である⁸⁾。かかる社会政治過程から新しいアクターが出現した。それはシエラやコスタの各地から海岸の都市部、とくにグアヤキルに定着した農民層であり、彼はこの階層をルンペンプロレタリアート（スペイン語でsubproletariado）と呼んでいる。要するにクエバにとってベラスキスモは、寡頭支配体制の危機における新たな政治支配の形式を意味していた。ルンペンプロレタリアートがエリート支配に挑戦してくると、ベラスコが、彼らの要求を抑え

つつ支配層の利害を代弁したというのである。

クエバに代表されるポピュリズム説が1970年代を風靡したとすれば、これに対する痛烈な批判は1980年になって提起された。それは同じくマルクス主義者のラファエル・キンテロが発表した『エクアドルにおけるポピュリズム神話』である⁹⁾。キンテロは1933年大統領選挙の実証分析を手がけ、その結果に基づいてクエバの諸説を批判した。キンテロは、実証分析を踏まえずにポピュリズムという曖昧な概念を採用したクエバこそが、エクアドルの社会科学にポピュリズム神話を持ち込んだ元凶であると述べつつ、ベラスコを当選させた選挙基盤はルンペンプロレタリアートではなく保守党だったことを明らかにしている。それに票田は海岸の都市部というよりもアンデス高地の農村部にあった。つまり1930年代の危機に際して寡頭支配層がすべて権力を失ったわけではなく、コスタのそれが失墜した反面でシエラの保守支配層はむしろ権力を強化し、ベラスキスモの後ろ盾になったという。彼の指摘する数値がそのことを如実に物語っている。当時の有権者は全人口のたった3.1% (64,682人) に過ぎず、その71.8%がシエラに集中していたが、ベラスコはそんな数少ない票の80.2% (51,848票) を獲得して当選したのだった¹⁰⁾。

こうして、クエバとキンテロの間で論争が口火を切った。前述のような批判に対しクエバは、キンテロは実証が過ぎて現実を見失っていると応酬し、1988年の改定版でも自説を繰り返している¹¹⁾。ベラスキスモにポピュリズム概念を適用することの妥当性や、実証を重視するか否かといった研究姿勢が二人を対立させたのである。両者の立場はいずれもマルクス主義であり、解釈が相容れなければ議論は平行線をたどらざるをえなかった。ただここでは論争そのものには深入りせず、その結果かえってベラスキスモに関する未解決の課題を表面化させた点にこそ論争の意義を認めておきたい。例えば次のような問いが残されたといえる。1930年代の危機とは何か、新しい社会層はどのように現れたのか、それは政治支配か抵抗か、またベラスコの出現は支持者にとって何を意味したのか。

キンテロは第一次政権の成立、つまりベラスキスモの起源についてはかなり明快な結論を引き出し、クエバの解釈に打撃を与えた。しかし、だからといってクエバの解釈がすべて誤りとはいえないし、反対にキンテロがポピュリズム概念を否定しても現象自体を排除できるわけでもない。しかもキンテロは、第二次政権以降のベラスキスモについては分析していないのである。ところがベラスキスモは長期にわたる現象であって、成立過程の分析のみで全貌が明らかになるはずはないし、エクアドルとくにグアヤキルでその後もポピュリズムが出現した事実をうまく説明できないと思われる¹²⁾。繰り返しになるが、第一次政権に関する説明が第二次政権以降にもあてはまる保証はない。いや、内外の政治社会状況やベラスコの変化という当然の可能性を考えれば、継続面だけでなく変化面を加味した網目のなかにベラスキスモの軌跡をたどっていく作業が不可欠となろう。

これまではベラスキスモに関するクエバとキンテロの解釈を取り上げてきたが、それらの周辺にもいくつかの研究は存在していた。前述したように1970年代においてはクエバの解釈が大きな影響力をもっており、イアンニ (Octavio Ianni) によるポピュリズム研究に示唆を与えたほか¹³⁾、エクアドル国内ではベラスキスモ=ポピュリズムという見方を広めたのだった。ウルタドの『エクアドルにおける政治権力』(初版1977年)¹⁴⁾にもその影響はみられ、ベラスキスモは都市化などの近代化過程の中で周縁化した都市民衆を支持基盤にして、カリスマ的指導者を中心に成立したポピュリズム運動だと解釈されている。彼によればベラスキスモは、政党としての組織化を促さない、何よりも選挙のための運動であった。ただしマルクス主義色が濃厚なクエバとは異なり、ウルタドには近代化論的な志向が看取できる。そこにはM. ウェーバーが定式化したカリスマ概念が導入されている。この点に一層注目したのはエステバン・デル・カンポであり¹⁵⁾、ベラスキスモには指導者のカリスマ的性格が特徴的だとする彼は、雄弁術や磁石的な個性によって民衆を魅了した点でベラスコに着目する必要がある、と注意を喚起していた。

他方、ポピュリズムと政治的クライアンテリズムの関連性に着目し、ベラスキスモ研究にも新視点を提供したのがメネンデスカリオンである。『エクアドルにおける票の獲得：ベラスコからロルドスまで』¹⁶⁾において彼女は、グアヤキル貧困層の投票行動を分析することでポピュリズムの支持基盤についての理解を前進させた。つまり都市の周縁層はポピュリスト政治家によって操作される受動的な存在ではなく、サービスの提供という反対給付を期待しつつ、むしろ主体的、合理的かつ功利主義的に投票行動を起こしたという。その研究対象にはベラスコが勝利した3回の大統領選挙(1952, 60, 68年、つまり第三次から第五次までの政権成立)についての分析が含まれ、しかも票田は都市部というよりは農村部だったとの結論を導いていることから、キンテロ自身が自説を補強するものだという趣旨で序文を寄せている¹⁷⁾。彼女自身はベラスキスモ自体の解釈を避けているが、いやおうなしにクエバ=キンテロ論争に巻き込まれているようだ。貧困層の主体性に注目したことは卓見だが、デ・ラ・トーレからは、その解釈は道具主義的なばかりか選挙という政治の一面だけに視野を限定し、実際のより広範な政治・歴史過程におけるシンボルや意味の重要性という側面を捨象してしまう欠点がある、と批判されることになる¹⁸⁾。

(2) 最近の動向

前述したように、1970～80年代におけるベラスキスモ研究の基軸をなしたのはクエバとキンテロによる研究であり、その間の論争であった。両者を中心とする研究者たちがエクアドル社会科学の進展に果たした貢献は大きかったものの、反面でベラスキスモをめぐる解釈は党派性さえ帯びて硬化した感もぬぐえなかった。これに対し1980年代末になると、ブルバーノとデ・ラ・トーレ編の研究書アンソロジーが研究史を総括して新たな方向性を模索し¹⁹⁾、さらに1990年代に入るといくつかの注目すべき研究が現れ始めた。

特筆すべきは、マイグアシュカとノースによる論文「ベラスキスモの起

源と意味：1920～1972年間における階級闘争と政治参加」であろう²⁰⁾。彼らはクエバ＝キンテロ論争に新たな貢献をなすべく第三の解釈を試みるとして、次の2点に集約される分析方法をとっている。一つはエクアドル国内におけるコスタ、シエラ北部、およびシエラ南部という地域的差異を考慮して社会経済的状况を分析すること。これは従来の研究が全国的視野を暗黙の前提としながらかえって地域差を無視しがちだったことへの反省による。そしてもう一つは、英国の歴史家トムスン (E. P. Thompson) による概念枠組 (階級闘争, 階級の形成過程, それに「モラル・エコノミー」) を採用し、エクアドル社会の資本主義への移行過程をとらえなおすという点である。

こうした観点からなされる分析は必ずしも試論の域を出ていないが、ベラスキスモの背景と起源について次のような興味深い点が指摘されている。①前提となる1930-40年代の経済危機は上記の三地域では様相が異なり、その各々で経済の多角化が進んでいた。②社会変化に伴い、上記すべての地域で「家父長的権威の危機」(crisis de la autoridad paternal) と権力者に対する中間層の「忠誠の危機」(crisis de lealtad) が生じていた。③労働運動は不安定化しアトム化していた。④ベラスキスモの支持基盤となったのはルンペンプロレタリアートでも保守勢力でもなく、形成途上の中間層 (手工業者, 中小の商人, 公務員など) であった。

ところで、モラル・エコノミーへの着目は民衆文化や政治文化に関する近年の研究で注目されている分野であり²¹⁾、これをポピュリズム研究にも応用しうる可能性が示されたことは刮目に値しよう。エリートの世界だけでなく民衆の世界にも目を注いでその心性や行動様式を読み解こうという試みは、ヨーロッパ史学でこそ一定の蓄積はあっても、ラテンアメリカ史学では未開拓の分野といえる。ポピュリズム現象を民衆とエリートという両世界のせめぎあいとの関係ととらえるならば、支持基盤たる民衆の側から光をあてることは確かに有益だろう。ただ、この点に関しては次のようなデ・ラ・トーレの批判があり、今後深められるべき課題となっている。彼によ

れば、マイグアシュカとノースは残念ながらトムスン流の分析をなしえていない。のみならず、エクアドルの前資本主義社会を均一的な社会とみなして共同体内部の権力関係に配慮せず、種々のアクターが過去について抱く多様で矛盾したイメージや価値をとらえていないという。さらにエクアドルの状況はトムスンの前提とは違い、異質な社会間(sociedades heterogéneas)における前資本主義から資本主義への移行であり、モラル・エコノミーという概念が適用できるか否かは疑わしいと指摘している²²⁾。

2. ベラスコイバラ：人物と思想

ラテンアメリカに簇生するポピュリズム現象のなかで、ベラスキスモの目立った特徴の一つは中心人物ベラスコその人が占める比重の大きさにある。反対にいえばペロニズムなどの典型例と比べて組織面が弱いために、ベラスキスモはどこかとらえがたく、一般的なポピュリズム論の議論から除外されがちだったのかもしれない。とすれば逆に、ベラスコに注目することでベラスキスモ自体の解明に道が開かれるのではあるまいか。しかし、この点はこれまで十分に検討されたとはいいがたく、実際、ベラスキスモ研究に比べてベラスコ研究は立ち遅れてきた。二、三の評論はあっても²³⁾、彼に関する体系的で学問的な伝記はなく、思想研究も1990年代になってやっと着手され始めたばかりの現状である。以下で若干の整理を行っておこう。

まず指摘すべきは、ベラスコが政治家という顔のほかにも様々な顔をもっている点だろう。1893年3月キトに生まれた彼は、法学部を出て会計検査院で勤務したり、有力紙『エル・コメルシオ』のコラムニストとして健筆をふうことでそのキャリアを開始した。知的環境という点で大きく影響したのはパリ留学(1931～32年間)であり、哲学を専攻しつつ当時のヨーロッパ世界から強烈な刺激を受けたようである。帰国後すぐに政界入りして国会議員や下院議長を歴任、1933年には大統領に当選する。それからは

前述のようにほぼ8～10年ごとに政権の座に就くが、政権にあった期間は5度の合計で12年10か月ほど（うち9年9か月が立憲大統領）にすぎず、残りは1979年の死去の直前までアルゼンチンなどの諸国で亡命生活を送ったのだった。

彼は政治家というだけでなく、弁護士、コラムニスト、大学教授などの職を務めながら、著述家および雄弁家として並外れた能力を発揮した。ベラスコの特徴といえば雄弁術がまっさきに指摘されるほどで、選挙や政治集会での演説は巧みだった。

「我にバルコニーを与えよ。されば大統領たらん」

(Dadme un balcón y seré Presidente.)

これはよく引用される言葉だが、そこにはベラスコの自信のほどがうかがえるばかりか、演劇的なパフォーマンス、いわば「バルコニーの政治学」²⁴⁾ともいうべき戦術が認められる。片手をかかけながら彼が演説を始めると、とたんにカリスマが顕現し、民衆は磁石のように引き寄せられる。貧困層に向けた「チュスマ」(chusma)という呼びかけの言葉は、ペロンが「デスカミサードス」という言葉を使ったのと同じ効果があったらしい。そしてエクアドル史上、大統領候補として選挙キャンペーンで全国を遊説した政治家はベラスコが初めてであった。

ポピュリズムが通常は政党を活動基盤にするのとは対照的に、ベラスコは独自政党の結成を重視しなかった。むしろ自分の運動が既成政党に代わる役割を果すことを期していたようで、組織化にはほとんど関心が向けられなかった。この点が組織的基盤が弱いというベラスキスモの特徴につながっている。もっとも1968年には、彼の支持者がベラスキスタ全国連盟FNV (Federación Nacional Velasquista) を結成するが、その活動期間はベラスコの死に前後する数年に限られた。

ベラスコには「偉大なる不在者」(Gran ausente) という呼び名も奉られている。もちろんこれは、政治亡命によってエクアドル国内よりもむしろアルゼンチン（およびコロンビア、チリ）などに滞在する期間が長かった

ことを指している。とくに夫人コリーナ・パラル (Corina Parral) がアルゼンチン人だったことから、その国で大半をすごし、ブエノスアイレスが主たる活動拠点になっていたようである²⁵⁾。しかしながら、ベラスキスモやベラスコに関する従来の研究では、そうした「亡命中のベラスコ」という点とその意味についてはほとんど検討されてこなかった。彼の活動と思想における外国経験の影響という面、それに「不在」という事実が支持者にどのように受けとめられたかというイメージの面にも、今後はメスを入れていく必要がある。それにしても、ベラスコはなぜ間欠的・断続的に政界に復帰しえたのか。不在ゆえに、彼のイメージが郷愁と待望の対象として人々の胸中でふくらんだためだろうか。

エクアドルの民政移管が間もない1979年3月にベラスコはキトで死去する。以後ベラスキスモは国政でほとんど影響力をもたなくなり、いわば歴史研究の対象となるに至った。その理由の一端は、ベラスコ自身が政党を通じた組織化を重視せず、信奉者の勢力も弱くて、意を継ぐ有力な政治家や政治勢力が現れなかった点にあるにちがいない。とはいえ、ベラスコが残した遺産は皆無では決してない。一例をあげれば、民政移管の過程で制定された現行の1978年憲法には大統領職務の再選禁止が規定されているが、それはベラスコのように同一の人物が何度も政権を担当して政情不安をもたらさないよう、軍部の意向を反映しつつ配慮が加えられたためと考えられる。

ところで、ベラスキスモ研究ではベラスコの思想が現象を解く一つの鍵になるであろう。しかし管見の限り、今のところまとまった研究はカルデナスレジェスの『ベラスコイバラ：イデオロギー、権力と民主主義』²⁶⁾のみとみられる。前述のように著述家としても知られるベラスコだが、多作ぶりは相当なもので『全集』は15巻が出版されており、ほかにも著作が存在する。しかも内容は多岐にわたり、いずれも高度に知的で哲学的な素養が反映している。カルデナスレジェスは、ポピュリズム論の検討を意図してはいないと断りながら、権力や民主主義との関連でベラスコの政治的言説

(ディスクール) がどんな内容をもったかを著作テキストから抽出・分析し、おおよそ次のような点を指摘している。

①時代の思潮としてベラスコは、19世紀末ロシアの主観主義やアナーキズムを吸収し評価していた。②実証主義の影響を受けて個人の自然権を否定的にとらえ、主権の存在を否認する傾向があった。③20世紀初頭におけるラテンアメリカ知識人の例にもれず、反功利主義と反米主義を掲げるアリエル主義(ウルグアイの作家ホセ・エンリケ・ロドーが『アリエル』で展開した思想)の影響を受けていた。④理念的には自由主義を掲げながら、実際の政治行動には宗教性に裏打ちされた伝統主義が濃厚で、しばしば保守性を強めていた。⑤ポリールを政治的近代精神のモデルとみなし、国内の自由主義についてはエロイ・アルファロ(Eloy Alfaro)を称賛せず、むしろ保守的なガルシアモレノ(Gabriel García Moreno)を評価していた。⑥普通選挙に基づく民主主義の価値は認めつつ、政党は重視しなかった、等々。こうした特徴はともすればバラバラにとらえられがちだが、そこからベラスコの思想的背景や政治理念に通底する水脈を探りあてていく作業は、今後さらに究明されるべき課題といえよう。

3. ポピュリズム論への射程

ここではベラスキスモに関するこれまでの議論を、ポピュリズム論のかかわりでとらえ直してみたい。そのためにはまず、ポピュリズムとは何かについて想起しておくべきだろう。ただポピュリズムと一口にいても種々の解釈が存在し、明確な定義を下すことは難しい。従来の研究も国や地域に応じた発現形態の多様性を示している。にもかかわらず、概念整理の努力が続けられてきたことも確かである。既存の研究を参考に取りまとめるならば、ポピュリズムの基本的特徴として次の諸点を指摘できよう²⁷⁾。

- ①寡頭勢力の支配に対抗して、現状の打破を目指す運動であること。
- ②外国資本に反対して民族主義(ナショナリズム)を標榜すること。こ

のため経済的自立の動きとなったり、土着主義（インディヘニスモ）に結びつきやすいこと。

- ③現状に不満を抱く上・中流階層や労働者・農民を糾合した階級横断的な運動であり、多階級同盟を形成すること。
- ④カリスマ的資質をもつ指導者に率いられること。多くの場合、指導者と支持者の間には社会正義などの、不明確だが社会的要請に応じたイデオロギーが存在する。
- ⑤都市的現象であること。

こうした特徴を考慮に入れると、ベラスキスモはとりあえず次のように位置づけることができよう。まず上記の①（寡頭支配層との関係）および③（支持基盤）については、これらがまさにクエバ＝キンテロ論争での対立点であり、ベラスキスモがポピュリズムか否かを判断する際の分岐点となってきたことが、明らかである。とくに支持基盤については、成立時（第一次政権）の分析が重要なのだが、後の展開過程も考慮に入れねばなるまい。⑤（現象の都市性）についてエクアドルでは、都市化や選挙権の拡大が域内先進諸国よりも遅れて1950～70年代に進展しており、この特徴が初期ベラスキスモに当てはまるとはいいがたい。これに対し④（カリスマ的指導者の存在）は、前述のように、ベラスキスモにこそ際立った特徴だといえる。だが②の特徴（反外資的な民族主義）の方は、むしろベラスコ後に登場したロドリゲスララ軍事政権（1972～76年）に顕著な特徴である。

このようにみえてくると、ポピュリズム論で抽出された特徴のいくつかは、ベラスキスモを説明する際にも有効であることがわかる。ただその前提として、1930年代と70年代の時期的な差異を考慮すべきだし、逆にベラスキスモには適用しがたい特徴が存在することも事実である。この点に關説すれば、ポピュリズム論でしばしば用いられるポピュリズム「体制」ないし「国家」という概念は、ベラスキスモには適用しがたいように思われるし、ポピュリズム「運動」という規定もあまりそぐわないようである。本稿で「ポピュリズム現象」という言葉を用いる所以が、そこに存する。

ところで、すでに指摘されているように、ポピュリズムのとらえ方も論者によって多様である。前述の研究書アンソロジーのなかで、ブルバーノとデ・ラ・トーレはラテンアメリカのポピュリズム論を概観し、従来の諸説を次の5つに分類している²⁸⁾。

第1の解釈は、ポピュリズムと従属の関係に着目するものである。これは農牧輸出モデルに立脚する寡頭支配体制の危機を前提とし、輸入代替工業化と結びついた体制としてポピュリズムを把握するもので、大きく2つの潮流に分けられる。寡頭制から官僚的権威主義体制への移行段階にポピュリズム体制を措定するオドーネル (Guillermo O' Donnell) やコリアー (David Collier) らの見方と、これに対し社会階級の形成や階級闘争を強調し、マルクス主義色が濃いクエバやイアンニらの見方である。

第2に、機能主義的な解釈が有力である。伝統社会から近代社会への移行期 (転換期) に出現する逸脱現象としてポピュリズムをとらえるもので、ジェルマーニ (Gino Germani) とディテラ (Torcuato Di Tella) が代表的な論客といえる。

第3に挙げるべきは、政治的言説との関連でポピュリズムをとらえるラククラウ (Ernesto Laclau) の見解であろう。彼はマルクス主義の立場から、支配的なイデオロギー的言説の危機がポピュリズムの発生をもたらすとしている。

第4は前述したように、メネンデスカリオンの研究に典型的にみられる、政治的クライアンテリズムの考え方を指摘できる。

そして第5に、レクナー (Nobert Lechner) やヴァーバ (Sidney Verba) らの政治文化論が挙げられる。これは政治 (国家) と社会の関係つまり指導者と民衆の合理的な関係に着目するもので、指導者によって審問された民衆が演劇的 (ドラマツルギカル) な行動を通じて政治生活に闖入する点にポピュリズムの本質を見いだしている。

こうした分類に立って両研究者は、従来の解釈では前二者、つまり従属論と機能主義に基づく解釈が圧倒的に主流を占めてきたと指摘する。この

ことは日本におけるポピュリズム論の受容と検討の状況をみても明らかだろう。注目されるのは、彼らが、それら2つの潮流には「目的論的な指向・偏向」(visión teleológica, sesgo teleológico)が顕著だと注意を促していることである²⁹⁾。つまり一定の歴史的な発展段階と結びつける見方がそれであり、換言すれば、ポピュリズムは1930年代における寡頭制国家と輸出主導型発展の危機とともに出現し、輸入代替工業化と時期的に符合したということになる。しかし両研究者は、この見方は2つの点で問題を抱えているという。一つは、従来のポピュリズム論が域内先進諸国の経験を下敷にしているため、アンデスや中米のような域内後発地域ではポピュリズムと輸入代替の始期に必ずしも親和性がみられない事実を見逃している点である。もう一つはより本質的な点だが、権威主義体制の崩壊後の1980年代に、いくつかの国でポピュリストやポピュリズム型の政権が出現ないし復活した事実をうまく説明できない点である。伝統から近代への移行という発展段階説の前提が繰り返さなければ、そうした遅咲きのポピュリズムの発生は、論理的に説明不可能となってしまう。要するに彼らは、ポピュリズムを一定の歴史的段階に発生する一過性の現象と考えるような目的論的発想に、原理的な反省を迫っているのである。

我々はこれらの指摘をどう受けとめるべきだろうか。第1の点については、エクアドルの場合、輸入代替は1960～70年代になって本格化したにすぎず、両研究者の主張に異論はない。他の域内後発地域についても同様の状況が指摘ができよう。これに対し第2の点は安易に結論が出せない課題だといえる。かつて研究者の多くは、1930年代から60年代に最盛期を迎えたポピュリズムがやがて退潮ないし死滅するだろうと考えたが、この見方は1980年代以降の現実によって否定されたばかりか、ポピュリズムの変質という新たな現象(いわゆる「脱ポピュリズム化」³⁰⁾)も生じて、理論の見直しが急務となっているからである。現状を打開しようとする動きはすでに表面化しており、周知のように、その代表的なアプローチがドーンブッシュらの提唱による「経済的ポピュリズム」の概念である。マクロ経済政

策に着目しつつ広義のポピュリズムを想定するこのアプローチには、確かに今後検討すべき論点が多々含まれている。が同時に、経済還元論に立つことで、政権や体制の相違を捨象しがちだという問題点も指摘できる。エクアドルのポピュリスト的政権を例にとれば、国家主導で民族主義的な経済政策を進めた「ペルー革命」型のロドリゲスララ政権の方が、ベラスコよりも一層ポピュリスト的だということになる。従来のポピュリズム論との関係を明確にしなければ、議論の混乱を招くおそれが大きいだろう³¹⁾。

次に、もう一つの代替アプローチを挙げると、それはブルバーノとデ・ラ・トーレが重視する政治文化論的なアプローチだろう。ポピュリズム論では指導者と支持者の関係をパトロン＝クライアント関係とみなす場合が多いが、彼らは両者の間におけるせめぎあいの過程に注目し、そこに生まれる演劇性やイメージといった要素を重視している。つまりポピュリズム現象を、そうした諸要素を含んだ政治文化の問題として再提起すべきだと主張しているのである³²⁾。発展段階説につきものの時代制約性からは距離をおいている点に、このアプローチの強みがあるといえよう。

おわりに

以上みてきたように、ベラスキスモの評価をめぐるには様々な解釈が存在し、一つに集約できないのが実情である。ペロニズムのような典型例との乖離がベラスキスモの把握を揺り動かしたことは確かだし、ベラスコをとりまく状況や彼自身が時代とともに変化したために、現象の実態がとらえがたく、解釈の幅を広げてしまったという面も否めない。支持基盤について取り上げれば、コスタのルンペンプロレタリアートとみるかシエラの保守勢力とみるかという点でクエバ、キンテロの対立が先鋭化してきたし、最近では中間層の存在を重視するマイグアシュカとノースの見解も出されており、にわかには判断しがたい。この点を明らかにするには、起源だけでなく展開過程をも対象としながら社会経済分析を続けなければならないだろう。

最後になるが、ポピュリズム論に対しベラスキスモ研究が問いかける問題点として、とりあえず次の点を指摘しておこう。

- ①ポピュリズムと輸入代替の始期に親和性がみられるとは限らないこと。
- ②ベラスキスモのように組織面が弱い現象をポピュリズムの範疇に入れるならば、ポピュリズムを運動、まして体制や国家とみなす議論は再検討されるべきであること。
- ③いいかえれば、政党などの組織に力点をおかない個人主義的なポピュリズムもありうること。
- ④指導者と支持者の関係をとらえるには投票行動だけでなく、政治文化面にも目配りが必要であること。

これらは、域内後発地域の経験をポピュリズム論に取り入れるべきだという教訓を示唆しているように思われる。つまり、エクアドルのような相対的后発国では、ペロニズムのような典型例から導かれる特徴をそのまま当てはめることはできない。また④との関連で付言すれば、ポピュリズム論では指導者と支持者のいずれに力点をおいて分析するかという二者択一ばかりでなく、両者の相互作用に着目する方法も不可欠である。ベラスキスモでいえば、従来主流だった支持基盤探しに加えてベラスコの人物研究が看過されてはならないし、さらにそれら両方向の研究が交錯する局面にも目を向けるべきだといえる。

小論では、従来のポピュリズム論で等閑視されがちだった小国エクアドル、とくにベラスキスモという具体例に焦点をあてて、その成果をもとにポピュリズム論にも考察を加えてみた。もとより具体例から一般論を照射するという作業は容易ではないが、それをつうじて当該国の理解を深めただけでなく、現実の前に混乱の感さえある現下のポピュリズム論に対しても、一定の方向性と可能性を提示することができたのではなかろうか。

註

- (1) Dornbusch, Rudiger and Sebastian Edwards eds., *The Macroeconomics of Populism in Latin America*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 1991.
- (2) 淵上隆「メキシコのポピュリズム国家と労働運動(1920-40年)」, *Latin American Studies* (『ラテンアメリカ研究』), No.4, 筑波大学, 1982年, 239ページ。
- (3) Conniff, Michael L. ed., *Latin American Populism in Comparative Perspective*, Albuquerque: University of New Mexico Press, 1982.
- (4) 中川文雄・松下洋・遅野井茂雄『ラテンアメリカ現代史II:アンデス・ラブラタ地域』, 山川出版社, 1985年, 124-125ページ。
- (5) Blanksten, George, *Ecuador: Constitutions and Caudillos*, Berkeley: University of California Press, 1951. ただし今回は, 下記註(19)の研究書アンソロジーに所収された西訳版テキストを参考にした。
- (6) Maier, George, “The Impact of Velasquismo on the Ecuadorian Political System”, Unpublished Ph. D. dissertation, Southern Illinois University, 1965.
- (7) Cueva, Agustín, *El proceso de dominación política en el Ecuador*, Quito: Editorial Planeta, 1988 (edición corregida y actualizada).
- (8) 19世紀から20世紀初頭にかけてのエクアドル史については, とりあえず次を参照。新木秀和「エクアドルの国家形成と地域問題—19世紀におけるグアヤキル地域主義の台頭—」『史境』第29号, 1994年, 歴史人類学会。
- (9) Quintero, Rafael, *El mito del populismo en el Ecuador: Análisis de los fundamentos del Estado ecuatoriano moderno (1895-1934)*, Quito: FLACSO, 1980. なお, 本書については次の書評を参照。Paul W. Drake, “Populism in South America ”(Review Essays), *Latin American Research Review*, Vol.XVII, No.1, 1982.
- (10) Quintero, *ibid.*, pp.281-282.
- (11) Cueva, *op.cit.*, pp.183-186.
- (12) エクアドルのポピュリズムとしてはベラスキスモ以外にも, グアヤキルにおけるC F P (人民勢力集中党)やP R E (エクアドル・ロルドス党)を通じたポピュリズム型政治が知られ, ゲバラ・モレノ (Guevarra Moreno), アサド・ブカラム (Assad Bucaram), アブダラ・ブカラム (Abdalá Bucaram) といった政治家の存在が重要である。詳しくはメネンデスカリオンの著書に加えて次の諸研究を参照。Martz, John D., “The Regional Expression

- of Populism: Guayaquil and the CFP, 1948-1960”, *Journal of Interamerican Studies and World Affairs*, Vol.22, No.3, 1980; Fernández, Iván y Gonzalo Ortiz, *La agonía del populismo*, Quito: Editorial Plaza Grande, 1988 ; De la Torre, Carlos, “Populismo, democratización y cultura política en el Ecuador de los años ochenta”, *Ecuador Debate*, Núm.17, 1989.
- (13) Ianni, Octavio, *La formación del Estado populista en América Latina*, México: Ediciones Era, 1975, p.163. イアンニがエクアドルのポピュリズムとして第一次ベラスコ政権を指摘しているのは、クエバの影響を受けてのことである。
- (14) Hurtado, Osvaldo, *El poder político en el Ecuador*, Quito: Ariel, Planeta-Lettraviva, 1989 (séptima edición).
- (15) Del Campo, Esteban, “El populismo en el Ecuador”, en Gerhard Drekonja et. al., *Ecuador hoy*, Bogotá: Siglo XXI, 1981.
- (16) Menéndez-Carrión, Amparo, *La conquista del voto en el Ecuador: de Velasco a Roldós*, Quito: Corporación Editora Nacional, 1986.
- (17) *ibid.*, pp.15-19 (Prólogo por Quintero).
- (18) De la Torre, Carlos, “The Popular Origins of Velasquismo in Ecuador (1930-1947)”, (manuscript), s. l. e. a. (1990 ?), p.10.
- (19) Burbano, Felipe y Carlos de la Torre eds., *El populismo en el Ecuador: Antología de textos*, Quito: ILDIS, 1989.
- (20) Maiguashca, Juan y Liisa North, “Orígenes y significado del Velasquismo: lucha de clases y participación política en el Ecuador”, en Rafael Quintero ed., *La cuestión regional y poder*, Quito: Corporación Editora Nacional, 1991. また次の論文も参照。Maiguashca, Juan, “Los sectores subalternos en los años 30 y el apareamiento del Velasquismo”, en Rosemary Thorp y otros, *Las crisis en el Ecuador: los treinta y ochenta*, Quito: Corporación Editora Nacional, 1991.
- (21) モラル・エコノミーについてはとりあえず次を参照。近藤和彦「モラル・エコノミーとシャリヴァリ」『シリーズ世界史への問い 6 <民衆文化>』, 岩波書店, 1990年。
- (22) De la Torre, Carlos, “Demagogía, irracionalidad, utilitarismo o protesta”, en Blasco Peñaherrera y otros, *Populismo*, Quito: ILDIS, El Duende, Abya-Yala, 1992, pp.51-52. なお、ポピュリズム理解には社会経済の分析だけでなく政治文化の分析も不可欠だとする彼は、とりわけ政治集会におけるカリスマ的指導者の政治的言説とそれを取り巻く儀礼性や象徴性、それに民衆との間に発現するカーニバル性などに注意を喚起している。現

- 在は、1944年の民衆蜂起を対象に研究を続けているようである。
- (23) ベラスコに関する評論としては次の二書が挙げられる。いずれも19世紀的なカウディーリョとみなしている。Cuvi, Pablo, *Velasco Ibarra: el último caudillo de la oligarquía*, Quito: Instituto de Investigaciones Económicas, Universidad Central del Ecuador, 1977; Arizaga Vega, Rafael, *Velasco Ibarra: El rostro del caudillo*, Quito: Ediciones Culturales UNP, 1985.
- (24) 落合一泰『ラテンアメリカン・エスノグラフィティ』, 弘文堂, 1988年, 141-145ページ。
- (25) ベラスコの義理の妹エステラ・パラル氏(Estela Parral de Terán)と筆者のインタビュー(1991年1月, キト市)に基づく。それによれば, コリーナ・パラル夫人はエクアドルの大統領夫人として初めて組織的に福祉活動を展開し, 1960年には児童財団(Fundación Nacional del Niño)を設立している。アルゼンチン出身という点を加味すると, エバ・ペロンの政策を取り入れた可能性が考えられる。
- (26) Cárdenas Reyes, María Cristina, *Velasco Ibarra: ideología, poder y democracia*. Quito: Corporación Editora Nacional, 1991.
- (27) 日本におけるポピュリズム論の研究状況については次の三書と, そこに所収された文献リストを参照されたい。細野昭雄・恒川恵市『ラテンアメリカ危機の構図—累積債務と民主化のゆくえ』, 有斐閣, 1986年, 第7～8章; 松下洋『ペロニズム・権威主義と従属—ラテンアメリカの政治外交研究』, 有信堂, 1986年, III部; 松下冽『現代ラテンアメリカの政治と社会』, 日本経済評論社, 1993年, 第2章。
- (28) Burbano y De la Torre, *op.cit.*(とくに Sección I: Reflexiones sobre el estudio del populismo en el Ecuador)
- (29) *Ibid.*, pp.16, 60.
- (30) 脱ポピュリズム現象については次を参照。細野昭雄「チリにおける脱ポピュリズムと民政への移行」, 松下洋「メネム政権下におけるペロニズムの脱ポピュリズム化」, とともに遅野井茂雄編『冷戦後ラテンアメリカの再編成』(アジア経済研究所, 1993年)所収。
- (31) この点については, 岡本哲史「中南米ポピュリズムのマクロ経済学」(書評)『アジア経済』第34巻第3号, 1993年, を参照。またロドリゲスララ政権については次を参照。新木秀和「エクアドルにおける民族主義的石油政策の形成と展開」『イペロアメリカ研究』第XV巻第1号, 1993年, 上智大学イペロアメリカ研究所。
- (32) 上記の註(22)を参照。なお, クエバもベラスコをめぐる象徴性に着目し, その政治的言説によって政治集会が宗教的儀式へ変貌するという側面を重

視している。この点に関連しては次のようなフィッチの指摘が注目されよう。「ベラスコのポピュリズムにおける宗教的シンボリズムや、それとスブルビオ(グアヤキルの都市周縁部)の住宅地におけるカトリック的農村文化との関係についてのクエバの議論は、ポピュリズム運動に関する既存の膨大な文献ではつねになおざりにされてきた諸要素のひとつを対象にする、見事な分析なのである」 Fitch, John Samuel, "Class Structure, Populism and the Armed Forces in Contemporary Ecuador" (Review Esseys), *Latin American Research Review*, Vol. XIX, No.1, 1984, p.272.

[付記]本稿は、日本ラテンアメリカ学会東日本研究部会(1993年10月30日、上智大学)での報告「エクアドルにおけるベラスキスモの形成と展開—研究史の再検討から」に基づき、加筆訂正を施したものである。